

「良く来たにし」雪のみちのく

「まるほん旅館」さ良く来たにし、なんもねたって、良い湯っこさ入って、うめえさがな食って、ゆっくりしていがいさまい。

湯宿のホームページにつられて雪のみちのくに足を伸ばしてきた。温泉は東北が良い、行くなら冬がいい。なぜなら湯質のすぐれた鄙びた宿が多いしまだまだ日本の原風景が残っている。おまけに宿代は安く客は少ない。

今回の旅程は、二月二十九日、伊丹空港から仙台に飛んで新幹線で田沢湖近くの乳頭温泉郷にある国民休暇村に連泊、さらに秋田から五能線経由弘前へ行き岩木山麓の獄温泉へ一泊、再び弘前から青森経由大湊線で下北まで、ここからバスで一時間十五分かかる津軽海峡に面した下風呂温泉に、翌朝同じルートを戻り弘前経由、青森・秋田県境の古遠部温泉に連泊、そこから比較的近い大館能代空港から帰阪した。一週間雪国の旅でした。温泉宿の印象などつれづれなるままに筆をはこんでみたい。

休暇村田沢湖高原

秋田新幹線田沢湖駅からバスで五十分ほどの乳頭温泉郷にある。休暇村はどこでも最も良い場所にある。ご多分にもれずここもブナ林に囲まれた標高八百メートルの高原にあり風呂は源泉掛け流しの贅沢さ。宿の企画でスノーシューお散歩会がある。近くのブナ林へスノーシューを履いての四十五分のお散歩。水気を含んだ雪だったためブナの小枝にも着雪、この風景が一番美しいといわれる。新雪の上に狸やウサギが可愛い足跡を残し、古木にはキツツキが穴をあけている。ブナの葉は落葉するとスポンジのように厚みを帯びて水を含み森の命を育む。裸になった枝にはもう小さな硬い芽が春を待っている。

積雪二メートル、足がもつれてしりもちをついてしまったが思うように起き上がれない。もがけばもがくほど沈んでゆく蟻地獄、ガイドに手を引っ張ってもらってやっと起き上がった。自分でも恥ずかしくなる体位だった。

もう一つの企画で、近くの乳頭温泉にマイクロバスで運んでくれる。かの有名な鶴の湯に日帰りで行ってみた。秋田藩主の湯治宿としての歴史も残りその本陣の佇まいが今も残っている。お風呂は泉質の異なる四つ源泉がわいている。雪に埋もれた一軒宿に着くとびっくりに。銭湯なみの混雑、有名な混浴露天風呂に入ったが脱衣がこの空気がない始末。三十名ほどの男女がやや温めのにこり湯を楽しんでいた。昼間の混浴だがそれほどの違和感はない。

五能線

どうしても行ってみたかった五能線。日本海沿いを走る鉄道ファンには垂涎の的である。秋田から弘前まで（列車により青森まで）座席指定不定期快速「リゾートしらかみ」に乗った。一ヶ月弱前に切符を申し込んだら、すでに満席に近くやっととびとびの通路側の席が空いていた。この日北国には珍しい好天、穏やかな日差しに波静かな日本海、鉛色の空に吹雪が舞い、荒波が砕ける日本海を想像していたら拍子抜けではあった。それでも五時間近い列車の旅はあきることなく、車窓からは雪を抱いた秀峰岩木山や八甲田山を眺

めることも出来た。

東京から来た男性と相席になった。五能線の空席待ちでやっと希望をかなえられたとか。よりによって昨日今日で往復していた。奥さんに一緒に行かないかと誘ったら「急な思いのきの旅はいや」と無碍に断られた。お互いに女性の強さをぼやきながら身の上話に時間を費やした。「一杯いきますか。地酒の太平山ですよ」ときた。嫌いではないのでご馳走になってしまった。イヤ〜フォンをしているのでたずねてみると「水森かおりの五能線ですよ」とか。いい旅してる。

嶽温泉小島旅館

弘前からバスで一時間、いわき山麓にある江戸時代から営業している老舗旅館。十四室のごじんまりした宿で豊富なにごり湯が青森ヒバの浴槽にあふれている。雪の中なんとなくひと気のない様子だと思えば、他の客はおらず今夜は貸切状態。風呂も食事も気兼ねなく過ごせるが今ひとつ寂しい。食事は豪華絢爛、マイタケのてんぷらに釜飯やたらきのこが多い。食べ残してはいけないと戦中派の悲しい性、老体に鞭打って詰め込んだ。一泊一万五千元。

下風呂温泉まるほん旅館

あまり名前は知られていないが下北半島のほぼ中央部、津軽海峡に面した小さな温泉街。代々女系の女将が仕切っているアットホームな宿。内湯は大きくないが白濁していてまるも高いところや端っこに行ってみたい本性はある。遠くに来たなあとの実感と充実感に包まれて湯船で目を閉じた。泊り客は湯治の男三人と我々だけ、外は雪模様、津軽海峡冬景色。帰り若い女将がハンドルを握って一人の客と相乗りで一時間もかかる鉄道駅まで送ってくれた。車中の会話「宿のアイドル猫ちゃんは何歳ですか?」「六歳のメスで野良ちゃんです、愛想がなくて、でも猫を訪ねて来てくださるお客さんもいます」「道理で人見知りするんですね。親から見知らぬ人になつてはいけないと教えられたんでしょね」我ながらつまらない会話をしている。一泊一万円。

古遠部温泉

奥羽本線津軽湯の沢から十五分ほどの山中の一軒宿。

決して立派な佇まいではないが料理や部屋の清潔さは満足できるもの。びっくりなのは風呂、総ひば造りの浴槽と床は鉄分で赤褐色になり、含石膏食塩泉の薬湯が溢れかえっている。湧出量一分間に五百リットルは桁外れ、川のように流れる床に横たわっている姿は他の温泉場ではあまり見かけない。主人に聞いてみると地質調査をしていて湯脈に当たりその権利を借りて脱サラして宿を始めた由。大多数の温泉は縦に掘削しているがここは斜め横に四百メートルほど掘っているとのこと。どうやら女将さんらしき人は見当たらない。主人いわく「仲居さんを募集しているが教育してもすぐ辞めたり、身内の不幸といって急に休まれたり」と嘆いていた。

宿泊客は二〜三組、日帰り客が多い。シーズンには一日三百人も押し寄せるとか。一泊六千九百円プラス暖房費。

一週間のみちのくの旅は終わり、大館能代空港から帰途に着いた。胴体着陸が得意な力ナダボンバルディア社のプロペラ機だが快適だった。

湯宿でも手酌ですます間柄



参考地図



平成二十年三月 菅田一郎 (RSK OB)

写真集は下記をクリックしてご覧下さい。
http://www.geocities.jp/mink_okayama/kandaphoto0803.html